—講演要旨—第 47 号　2006 年秋季号

第３５回セミナー　「私の辿り求めた創薬人生」　平成１８年７月１８日（火）

講師：テノックス代表取締役会長　ゲノム創薬フォーラム代表　　野口　照久氏

講師略歴：１９２４年生まれ。東京大学医学部薬学科卒業、東京大学大学院医学研究科修了、薬学博士。１９６６年日本曹達（株）生物科学研究所所長、１９７３年帝人（株）取締役生物医学研究所所長、１９７３年サントリー（株）取締役生物医学研究所所長、１９７７年同社専務取締役、１９８２～１９９５年米国ロックフェラー大学兼任教授、１９９２年山之内製薬（株）代表取締役副社長、１９９６年同社相談役（現在に至る）、１９９６年（株）ヘリックス研究所代表取締役社長、１９９７年ゲノム創薬フォーラム代表、１９９８年テノックス研究所設立、代表取締役会長、東京理科大学特別顧問、米国微生物アカデミー会員（現在に至る）。
１９７０年国際植物薬学会賞、１９７６年全国発明内閣総理大臣発明賞、１９７２，１９８２年大河内記念賞、１９７７年全国発明賞、１９７８年紫綬褒章、１９９０年日本薬学会功労賞など、
他受賞歴多数。

○　はじめに

私の研究人生６０年の中で、多くの人々に出会った。この「出会い」が、私の研究に、人生に関与し、今日の私を創り上げている。出会いは人間活性化の原動力である。私は約１０年を単位として、学界、産業界に身を置いてきたが、このために多くの分野の人々と出会い、ここから得た事が、研究の方向を示し、またヒントとなる事が多かった。

○　東京大学における１０年間

私は薬学科３年、医学科６年、計９年を東京大学で学んだ。薬学研究のためには、医学知識が必要であった。この間，多くの学部の教授より薫陶を受け、また学生とも接触した。

＊薬学科学生の時，ＧＨＱよりの報酬と、製薬会社よりの奨学金を元にして、戦争中５年間の研究空白部分の情報を、ケミカルアブストラクトより調査し、奨学金提供の会社にお礼として提供した。またこの情報をもとに化学誌「化学の領域」を発刊した。編集に当たり，各学部の先生方の知遇を得た、また学生間の協力もでき、編集技術の修得は、後々までも役にたった。

五月祭の委員長を務めたが、各学部の学生代表と知り合いとなり、お互いに後々まで友人関係を持続した。

＊知遇を得た先生　　緒方章先生（担当教授）：ホルモンの研究、将来教授を目指すべく指導を受ける。人間生命の原理を知る。先生の講義より多くのヒントを得た。　　伊藤四十二先生（卒論担当教授）：蛋白質ホルモン、プロテインの研究が予定されていたが、牛は草のみ食べて、牛肉蛋白を作ることに着目、葉酸、ビタミンの研究を願い、許可された。この研究は将来ライフワークに繋がった。　日置陸奥夫先生（金沢大内科教授）：自らの志望、生化学の研究が出来ぬため、これを私に託された。私はこれを受け核酸の研究を始めた。サルファ剤の効用を認め、これを持って東大生化学教室に移った。金沢大内科に在籍中、患者の苦しみを目の当たり見て医薬研究の必要性を痛感した。核酸の研究は将来ゲノムの研究に繋がった。東大医学部生化学教室の島薗・吉川・三浦教授とともに核酸の研究に苦労した.

東大医学部教授には特定の家系の人が多く、優秀なグループを作っていた。私はこのグループに入り得たことは、良き「出会い」を享受したものと考えている。

○　**日本曹達（株）生物科学研究所**

東大に在籍１０年、学位を取得した頃、過去に関係した日本曹達、大我専務、桶田常務より５億円かけて研究所を作りたいとの話があった。大我専務は魅力的な人で、日曹は塩素、ソーダを生産している、研究は塩素系の薬剤、農薬を指向するとのことであった。農薬に無経験のため、理学部服部静夫教授に相談した。服部教授は農作物の市況を勘案して、水稲の農薬は価値無し、葡萄、柑橘の農薬を推薦された。蜜柑生産の北限は神奈川県花水川とのことで、二宮、大磯を調査し、大磯が適地と考えた。大磯は東京より１時間半、人々の交流が容易で、情報の収集が容易である。服部教授は理学部教授で、その卓見に驚かざるを得なかった。農薬研究の必要から、本会理事の山本出先生の恩師の山本亮先生より農薬研究法を伝授された。この時の教授内容を山本亮先生の著者名で「新農薬研究法」として纏めた。私は抗ウイルス剤の部分を纏めた。葡萄の疫病に効く農薬（トップジン)、水虫の薬（トルナフテート）を開発し、これが日本の農薬、医薬特許の技術輸出第一号となり、アメリカの微生物アカデミーの会員となった。またこの特許料の収入により、大磯研究所は３年で償却した。葡萄の農薬は服部教授の推奨品であり、水虫の特効薬は金沢大学校庭の野生どくだみを成分とする。発明、発見は常時考えていると、偶然ヒントを得、これが創造に繋がるものである。

○　**帝人（株）生物医学研究所**

日曹今井社長は、帝人大屋社長が通産大臣の時の石炭局長で、親分子分の関係にあった。日曹の私は、大屋社長との連絡係であった。ある時大屋社長の大磯研究所訪問があり、世界の食糧不足に備え、３億円で石油よりの蛋白製造の研究依頼があった。これに応え、帝人より人材の供給をうけ、米国、欧州の調査をしたが、当時石油に含まれるベンツピレンの発ガン性が問題となり、蛋白原料は大豆に傾いていたので、計画は中止した。その後帝人生物医学研究所所長を拝命した。繊維会社より医薬品会社への転換を図り今日の帝人ファルマの基礎を作った。

○　**サントリー生物医学研究所**

帝人の医薬事業参入を成功させたので、かねて昵懇の佐治社長のサントリーに移動した。.此処では、海外の友人との関係から、オーストラリア、ロシュのマリン薬理研究所を購入、海洋双胴船サンバードにより、「海からの創薬」開発に努めた。

○　**海外の知人、友人**

ロックフェラー大学兼任教授、ハーバート大学との接触、学会、相互訪問等により、多数の学者と昵懇のなかになった。その中にはノーベル賞クラスの学者も多く、彼等との交流は私の研究、活動の動力となっている。国と企業よりの拠金によりゲノム国際研究のため「ヘリックス研究所」を創設して大きな成果を樹立した。ゲノムの研究は私のライフワークである。

○**「創造の心」**

新たなる創造は
夢で作られ
情熱で究められ
使命感で結晶する

野口　照久

懇親会

山本理事の音頭取りにて、「GOLDEN　PAST は GOLDEN　FUTURE に繋がる」と信じて乾杯、次々に今日の感銘を披露し、良き機会を利用して、先生への質問を再度お願いした。先生は人生経験者の立場、生化学者の立場より回答され、一同本日の感銘を益々深くした。最後に森下氏の一本締めにて閉会した。今日のセミナーを４０年早く、５０年早く聞きたかったというのが聴講者の感想ではなかろうか。

（文責：常務理事　安達勝雄）